BAIEIDO-TSUSHIN

梅栄堂通信

Vol.49

'07 夏・秋号

新しい香りを楽しむ

残香飛®（ざんこうひ） ブラック

『残香飛ブラック』で、
上質な時間をお過ごしください。

ご好評をいただいているコーヒーの香り『残香飛』に、少し渋みを加えた香り「ブラック」が仲間入り。コーヒーの香りには六〇〇種以上の香気が含まれ、右脳の働きを活発にしたり、情緒を安定させるなど数々の薬効があるといわれています。リラックスしたいひととき、新しい香り『残香飛ブラック』を、ぜひお試しください。

●標準小売価格 1,050円（本体価格 1,000円）

創業三百有余年
梅栄堂
〒590-0943 堺市堺区車之町東1丁1番4号
TEL 072(229)4545(代) FAX 072(227)1672
ホームページURL http://www.baieido.co.jp

第二回国際沈香会議に出席して

梅栄堂　中田　恭三朗

第二回国際沈香会議が三月四日から一週間タイ・バンコクと東部チャンタブリ県・トラット県で開催された。沈香の状況は相変わらず深刻で、良質の物は目が飛び出るほど高騰している。三月三日、バンコクに入る。会議の前夜、歓迎パーティーが行われたが、今回は三〇カ国から約百十名が出席。前回同様、いやそれ以上に"沈香談義"に花が咲いた。

▶熱心な講演で始まった第二回沈香会議

各国の沈香事情…

会議初日、開会式に続き基調講演が始まる。

タイ王室研究所教授（Prof.Santisuk Tawatchai）による東南アジアにおけるAquilaria種（沈香の種類）の分類学、地理学、生態学見地からの発表がある。Aquilaria種は南、東南アジアから太平洋にかけて約二〇種類が存在する。乏しい情報のため、野生のものを全て網羅することは難しいが、各国に何種類かずつは存在が確認されている。次は、ミャンマー森林資源環境開発協会所長（Mr. Than Aung）による講演だ。日本政府援助の沈香植林事業のお陰で、現地の農民が沈香採取の仕事に就くことができるようになった。沈香樹は、一年位でもオイルは溜まり、直径十三センチ位で、高さ四～五メートル、五年程の木なら十分伐採できる。ほとんどは小さく砕いてからオイルを採取する。講演の後、Mr. Thanに話を聞く。ミャンマーの沈香の品質は大変よいが、残念ながら公式な販売ルートはまだ確立されてないとのことだ。

続いて、Mr. Wang Xiangshe（海南島にある中国熱帯農産物科学アカデミー研究所）の中国における沈香の有効使用、研究、開発についての報告。沈香は希少な漢方薬として長い歴史を持っており、幅広く使用されている。例えば、気の力で体の芯を温め、肝臓を健やかに保つなどの効用がある。仏事にも使い、僅かだが装飾品としても喜ばれている。

海南島では十五年前から沈香の植林が始まり、現在は植林した木に、釘を打ちつける方法が取られている。そのほか、日本からは、松栄堂社長畑氏より「日本の沈香の取引の現状と保存」についての講演があった。TRAFFIC東南アジア担当者からは、沈香産業の法的規則とその維持についての報告。採取可能な野生の沈香は主にAquilariaとGyrinopsの二種類あり、CITES（※注）では取引が規制されている。沈香の用途は薬用・芳香・宗教用として昔からあるが、採取が進み、インド・ベトナム・中国・タイ・フィリピンではすでに採り尽された。インドネシア・パプアニューギニア・ラオス・マレーシアでは、まだ残っているものの、ブータン・カンボジアは消滅の危機にさらされている等、講演は二日間にわたった。

どこかで見た写真？

会議終了後、メンバーのアメリカ人が親しいというアラブ人街の沈香屋に連れていってもらう。その店でアラブ式の食事をご馳走になる。店先の沈香を見せてもらい、色々と裏話を聞くが、やはりベトナム・カンボジアの沈香はほとんど取り尽され、今は出回っていないとのこと。いま出回っているのはラオスとミャンマー、そしてインドネシア、マレーシア産がほとんど。複雑なルートで沈香は流通しており、はっきりとした産地別に区別するのは困難である。一番消費の多いアラブ向けには、沈香でない木に色を付け、形を整えた物が安く売られているらしい。それで満足している人もいるとのことだ。

ここでは、麝香・龍涎香（りゅうぜんこう）、白檀など何でも手に入る。麝香・龍涎香は食べる物であるという。アラブでは何人もの奥さんを持つので麝香・龍涎香を蜂蜜と混ぜて食べないと体が持たないと大笑いをしていた。

会議の会場をバンコクから東へ約三百五十キロのチャンタブリへ。途中で立ち寄った、植林沈香業者のショウルームで販売している沈香の本を購入する。と、なんとそこに、私が十年前にインドネシアで撮影した沈香の写真が掲載されていた。周りの人にそのことを言うと、『本代を返してもらったら』と冷やかされる。

会議会場をタイの最東端タラット県のコーチャン島に移すため移動。

途中沈香農園を訪問。ここでは、沈香を植えて十五年になるが、最近になって、皮を剥いでドリルで穴を開ける方法や、ドリルで開けた穴に薬品を流し込む方法など、樹脂を強制的に作り出す色々な方法を取り入れ、沈香を作るようになってきた。

▲樹脂を溜めるために細工をした植林沈香

植林がすすむ沈香農園▶

◀ CITESについての意見交換

植林沈香は直径三〇センチで伐採し、オイルを抽出する。現在のところ樹脂部分は少なく、色も薄そうだ。その後は、KUFF Trat農業試験場による沈香栽培の実情を視察。少し先は、もうカンボジアだ。

グループディスカッション始まる

コーチャン島での沈香会議が始まり、九時から五時半までグループディスカッションが行われた。

私は約二〇人の沈香の国際取引と規制のグループに入る。内容はCITES※注における規則への提案、意見の交換などだ。全ての沈香製品にCITESが要求されているが、最終製品はその制限から外してはどうか。外すならどこまで除外するのかなどを討論。各国の最終製品として、沈香のオイル、沈香油の絞り粕、香水、線香、タバコ等が提示された。

司会者のMr.Comptonとは顔見知りなので、よく意見を求められる。日本の沈香製品は何があるか?沈香取り扱い業者の団体はあるのか?設立の予定はあるのか?偽物沈香の日本での実態はどうか?等々。『偽物沈香については、日本でも問題になっている。以前は、沈香は主に線香メーカーが扱っていたが、最近は新しい業者が扱いだし、まぎらわしい物が出回り、よく鑑定依頼がある。』と説明する。今回は主催国タイを始め、約三〇ヵ国が参加。だんだんと国際会議らしくなってきた。各国サイドからも色々な話が出た。

Mr.Comptonによると、沈香の原木、塊、オイルはCITESから外れることはないが、それ以外の製品については削除される可能性もあるとのことだ。話の内容から、彼はCITES関係者の間では影響力があるようだ。

夕食時に親しくなった台湾の人から植林栽培の沈香をもらったが、栽培ものとは思えない様なずっしりした沈香で、香りもしっかりしている。会議主催者からは、ベトナムで栽培した沈香をもらう。前回ベトナムでの会議で見た沈香とは比べ物にはならないほど、いい沈香が採取されている。

▲コーチャン島の入り江

野生の沈香を求めて命がけで岩場を登る▶
（コーチャン島）

沈香を求めてジャングルへ

長い会議もいよいよ最終日。午前中は、コーチャン国立公園へ沈香木を探しに行くグループに入り、朝八時ホテルを出発。車で一〇分、そこから徒歩で約一時間の所のジャングルが目的地だ。ガイドと一緒に約三〇名が参加した。最初は道がついているが、だんだん道なき道を行く。途中でメンバーも半分に減り、命がけの垂直の岩場を登り、体中に付く蟻と戦いながら進むが、最後には道もわからなくなり、残念ながら諦めた。もう膝や肘は傷だらけだった。ホテルに帰りシャワーを浴びる。ふと下を見ると、私を悩ましたあの蟻たちが落ちていた。結局ジャングルでは誰も沈香木を発見できなかった。

夜は、さよならパーティーで、日本人のFAO（国際連合食糧農業機関）担当者と話す。彼はバンコクを基点にアジア四〇ヵ国の森林産物調査を受け持つ。FAOも最近、沈香について研究を始めている。山中の農民の収入確保のためにも、植林事業を支援していく考えで、今回は沈香会議にも一万ドルを寄付。沈香植林資金援助を今後も増やす予定だそうだ。

『色々な国際会議があるが、政府、研究者、業者がお互いザックバランに直接色々と情報交換できるのは珍しい。日本も興味を持って、もっと多くの人が参加してほしい。日本に帰ったら、一度梅栄堂に寄せてもらいたい。』とのこと。パーティーは砂浜際のホテルの庭で行われた。メンバーは皆、遅くまで別れを惜しんで話し合い、多くの国の人たちと親しくなり、会議だけではなく、直接、色々な情報を得ることが出来た。

▲沈香について話がつきなかったさよならパーティー

今回誰に聞いても、ベトナム沈香の"天然もの"は、ほぼ取りつくされたと情報は一致している。他の国の沈香もますます入手が困難になるだろう。従来の"野生沈香"の時代が、いずれ"栽培沈香"に代わるのも時間の問題だ。そして今後は、いかに品質のよい樹脂を作り出すのかということに関心が集まっていくだろう。

※注 CITES（ワシントン条約）…絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約

『香料の宝庫』と呼ばれるにふさわしい木

オレンジ

オレンジには、われわれが果実として食べているスイートオレンジと、主に香料に用いられるビターオレンジの二種類があります。ビターオレンジは花、果実、葉、枝などそのあらゆる部位から、それぞれ違った香料が採取される珍しい木です。

オレンジを始めとする柑橘類の原産地はインドのアッサム地方といわれ、中国では紀元前一世紀頃からすでに栽培が始められていました。

ヨーロッパに香料の原料となるビターオレンジが伝わったのは、一〇～十一世紀の頃。その後南仏のグラースで栽培が盛んになりました。現在ではスペイン、モロッコ、チュニジア、フランスなどで栽培されています。

ビターオレンジの白い花からは、その抽出法によって二種類の香料が得られます。ひとつは水蒸気蒸留によって得られる高級な香料『ネロリ』。『ネロリ』はイタリアのネローラ公妃がオレンジの香りを愛し、いつもこの香りを漂わせていたためについた名前だとか。微妙な甘さの中に、繊細で、高貴な雰囲気をかもし出す香りを持ち、高級な香水や化粧水などの香材として使用されています。同じく、ビターオレンジの花からは溶剤によって抽出されるものとして、『オレンジフラワーアブソリュート』があります。また、果皮からは圧搾法でさっぱりとした苦味を伴ったエッセンシャルオイルが抽出され、葉や小枝からも香料が得られるなど、ビターオレンジはまさしく『香料の宝庫』と呼ばれるに値する豊かな木といえるでしょう。

●話題

BEAT　～時代の鼓動～

よみうりテレビの番組『BEAT』は夢に向かって進化し続ける企業や人にスポットを当て、ハイビジョンによる映像でスタイリッシュに描き出すインタビュー番組です。十二月十六日の放送分では、梅栄堂の中田社長が紹介され、「三五〇年の歴史の中で培われた伝統を守りながら、日々新しい香りを求めて、よりよい線香を創り出していきたい。」と熱く語りました。

堺『ワザ列伝』

テレビ大阪十二月三〇日に放送された一時間番組『黒谷友香の堺ワザ列伝』では、堺市出身の女優黒谷友香さんが堺を訪れ、堺独自の手作り精神を受け継ぎ、また未来に繋げていく「堺ブランド」として認定された『堺技衆』を次々と紹介されました。おなじみの自転車、刃物を始め、伝統を守ってすべてが手作りされる鯉幟の「ワザ」や、「究極のメロンパン」作りを目指すパン職人の「ワザ」など、こだわりの職人技が目白押し。そんな中で「伝統と革新のお線香」作りを目指す企業として、梅栄堂の「ワザ」も紹介されました。

『ちい散歩』と『残香飛』

俳優の地井武男さんがお勧めの散歩コースを紹介するテレビ朝日の番組『ちい散歩』。三月二十六日放送分では江戸川区の「小岩」界隈を散策。街を歩きながら、ふと入ったお線香屋さんで見つけたのがコーヒーの香りのお線香『残香飛』。お店の方に焚いてもらい、その香りにほっと一息。その後も懐かしいもの、おいしいもの、楽しいものを求めて地井さんのワンデー・トリップは続けられました。

梅栄堂三五〇周年を迎える

梅栄堂は創立三五〇周年を迎えることができました。これもひとえに皆様のおかげと感謝いたしております。

記念商品の発売や、商品への記念ラベルの添付のほか、この『梅栄堂通信』でも、創刊以来約二十年間の記事のあらかたを一冊にまとめたものを年内にお届けできることになりました。ぜひ、ご一読いただければと思います。

●記念商品、完売御礼

梅栄堂創業三五〇周年を記念して三五〇箱を限定で発売させていただきました最高級お線香『伽羅、沈香、白檀』（小売価格五万二千五百円）はおかげさまで発売後まもなく完売。ご好評のうち、販売を終了させていただきました。

歴史に甘えず、よりよいお線香をお届けできますよう、なお一層の努力を心がけてまいりますので今後とも梅栄堂のお線香をどうぞよろしくお願いいたします。

〈今号の表紙／葛（クズ）〉